理事長講演

子どもは未来だから 一 日本子ども学会の果たす役割

榊原洋一(お茶の水女子大学教授)

私はこれまでに多くの国を訪問しましたが世界中どこ へ行っても子どもたちは幸福な顔をしています。発展途 上国の貧困な家庭で育った乳児でも、母親に抱かれてい るだけで笑顔をみせます。自分の身の回りの、この今が 幸せであれば、子どもは幸福なのです。

しかし、その子どもも年齢を重ねるうちに、自分の存在を相対的にみることができるようになってきます。また、未来を見通す力もついてきます。それは子どもの成長発達の証でもあります。しかし、同時にこうした能力を獲得することによって、それまで心の支えであった本人の能力によって左右されない「自己効力感」が、自分自身の相対的な能力によって左右される自尊感情に置き換わってゆきます。保育園、幼稚園では、本人のさまざまな能力が他人によって評価されることはほとんどありません。しかし小学校に入ると、成績やスポーツの能力などが、本人の意思とは無関係に本人の相対的な評価につながり、自尊感情のスコアは下がってゆくことが知られています。

その時その時の感情によって支えられていた幸福感 も、本人の生きている社会状況によっては、将来まで続 くものではないことを知るようになるのです。

自分の将来を見通す力は、人間だけに備わった能力です。人に最も近い理知的な能力を持つといわれているチンパンジーにも、将来を見通す力がないことは、京都大学の松沢哲郎さん研究からも明らかです。

子どもも大人に比べて、この「時間的に延長された自己」を見通す能力がまだ備わっていません。しかしこれは欠点ではなく、自分の将来を心配することなく、現在の幸せを満喫できるという特典があるということです。

小林登先生は、未来の世界の中で生きてゆくのは、私たち大人ではなく子どもたちであるという意味で「子どもは未来である」と言われました。ただし子どもには未来を予見できないのです。子どもたちは未来を生きる存在であるからこそ、私たち大人は子どもたちの代わりに未来をできるだけ予見し、未来の大人(現在の子ども)が生きやすい世界をつくり上げてゆくことに責任があるのです。子ども学会の目的は、私たちの子どもたちに対する責任を如何に果たしてゆくか研究し、実践することなのではないでしょうか。



〈プロフィール〉

1951年、東京生まれ。1976年東京大学医学部卒。東京大学小児科講師を経て、現在、お茶の水女子大学 人間発達創成科学研究科大学院教授。専門は小児神経学、発達神経学特に注意欠陥多動性障害、アスベルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。2013年よりチャイルド・リサーチ・ネット所長。著書:『オムツをしたサル』(講談社)、『集中できない子どもたち』(小学館)、『多動性障害児』(講談社+ a 新書)、『アスベルガー症候群と学習障害』(講談社+ a 新書)、『ADHD の医学』(学研)、『はじめての育児百科』(小学館)、『子どもの脳の発達 臨界期・敏感期』(講談社+ a 新書)など

座 長 **小林 登** (CRN 名誉所長·東京大学名誉教授)

医学博士。チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) 名誉所長。東京大学名誉教授。国立小児病院名誉院長。日本子ども学会名誉理事長。日本赤ちゃん学会名誉理事長。日本母乳保育学会名誉理事長。日本子ども虐待防止学会名誉会長。1954年東京大学医学部医学科卒業。 米英留学。東京大学教授、国立小児病院院長、国際小児科学会会長などを歴任。日本医師会最高優秀功労賞 (1984年11月)、毎日出版文化賞 (1985年10月)、国際小児科学会賞 (1986年7月)、勲二等瑞宝章 (2001年秋)、武見記念賞 (2003年12月) などを受賞。主な著作は、小児医学専門書以外には『ヒューマンサイエンス』(中山書店)、『子どもは未来である』(メディアサイエンス社)、『育つ育てるふれあいの子育て』(風濤社)、『風韻怎思―子どものいのちを見つめて』(小学館)、『子ども学のまなざし』(明石書店) その他多数。

